

フランスにおける仏教受容史

—19世紀の宗教研究を中心に—

満 足 圭 江

1 フランスにおける仏教受容の萌芽

フランスに初めて仏教が紹介されたのは、現存している歴史上の文献を辿ってみると16世紀に遡る。ルイ12世の統治下、ソルボンヌ大学で教鞭を執っていたジロラモ・アランドロ (Girolamo ALEANDRO) は、カトリックの伝道師たちがヴァチカンに持ち帰った東洋の多神教的な神仏像のイメージをフランスに伝えた。また、アランドロ以外にもヴィンチェンツォ・カルターリ (Vincenzo CARTARI) が「古代の神々のイメージ (Imagini de gli Dei delli Antichi)」という題の著作をパリで出版し、様々な東洋の神々の図像を紹介した。そこには千手観音や十一面観音のつもりであろうか、胸部に7つの頭をもち、15組の手を胴体より伸ばし王冠を戴く「ミヤコ」の仏像が西洋風のユーモラスな寓話像として描かれている。さらに、獅子に乗った文殊菩薩や増長天などの図像もより東洋的な伝統に則った形で紹介されている。彼等の著作は、フランスと仏教との出会いを物語る貴重な資料として今もソルボンヌ大学の図書館に大切に保管されている。このようにフランスにおけるイコノグラフィ (図像学) 上の仏教受容は16世紀に萌芽をみた。そして、それは19世紀に、インドはもとより日本まで足を伸ばし膨大な数の仏像や仏教美術品、文献資料の収集に専念し、帰国後それを収めた美術館を設立した実業家エミール・ギメ (Émile GUIMET, 1836-1918) や銀行家アンリー・セルヌスキー (Henri CERNUSCHI, 1821-1896) の片腕となってコレクション収集に働いたテオドール・デュレ (Téodore

DURET) などにより最盛期を迎えた。彼等は日本を訪ね、明治維新後大名家の保護を失ったり、政府の神仏習合政策の余波を受けて、経済的な地盤が弱まっていた名刹から易々と貴重な仏像を買い上げフランスに送った。ギメは1889年リヨンに東洋の宗教資料文献を収めた図書館を開設し、そこで将来オリエント学者となるべき青少年の育成を目的に極東の言語を教授し、さらにインド、中国、日本、エジプト、ギリシア、ローマ帝国の神々を集めた宗教美術館を開館した。また1900年のパリ万国博覧会では、日本館に展示された見事な数々の仏像が好評を博し、当時流行していたジャポニズムの熱がますます高まった¹⁾。しかし、テキストとしての仏教の受容は、サンスクリット語やパーリー語、ゼンド語などの東洋系言語の専門家が登場する19世紀中葉まで待たなければならなかった。

西欧人にとっての19世紀は、産業の発展がもたらした富が、個人的な長距離の旅行を可能とし、またそれによって考古学的発掘や文献学が飛躍的な進展を遂げた時代であった。もちろんその背景には、富の追求である植民地主義があったことは見逃せない²⁾。一方、精神的な面では、18世紀の啓蒙哲学思想が順調に成長し、ブルジョワ階級の登場を伴った近代個人主義の発展によって、日本研究で著名なベルナール・フランクが言っているように、宗教が「信仰者であるか自由主義者であるかを問わず、科学的または個人的な探求」の対象となった時代である³⁾。

後に詳しく扱うが、19世紀第三共和政下のフランスでは政教分離が進み、公教育の現場では政教分離政策が推し進められた⁴⁾。この政策は高等教育に関しても適用され、1885年国民議会と上院は、ソルボンヌ大学内にある神学部⁵⁾の廃止を決議し、その代わりとして「聖なる科学」を研究する学部が誕生することとなった。そして、翌1886年、旧神学部のあったところに、現在の実践高等研究院 (École Pratique des Hautes Études) が開設され、その中に宗教科学研究を専門とする第5セクションが置かれた⁶⁾。このときより、宗教研究は公的に神学者の手を離れ、実証主義の光のもとで、科学としての道を歩むことになった。しかし、宗教研究が科学となるには、ウージェンヌ・ビュルヌフやエルネス

ト・ルナンといった優秀でしかも宗教研究に情熱を傾けた言語学、文献学の先駆者たちの多大なる尽力と功績を必要とした。つぎに彼等の生涯と業績を辿りながら、言語学の専門家であり、文献学者としてスタートした彼等が、どのようにしてしだいに宗教研究へ専念するようになったのかを説き明かしてみたい。

2 フランス仏教研究の金字塔ビュルヌフ

現在に至るまでウージェンヌ・ビュルヌフ (Eugène BURNOUF, 1801-1852) が、フランスにおける仏教研究の第一の功労者であることは誰人も異論のないところである。1801年4月8日、高名なギリシア語文法書の著者ジャン・ルイ・ビュルヌフを父として、ビュルヌフはパリで生れた。ビュルヌフは名門ルイ・ル・グラン高校を優秀な成績で卒業後、パリの国立古文書学校 (École des Chartes) に入学、1824年には文学士と法学士の学位を取得した。その後サンスクリット語を学び、初めは法学に関心があったことから、マヌ法典などインド・ヒンズーの法典を研究した。1826年、25歳のビュルヌフはシャルル・ラサン (Charles LASSEN) との共著「ガンジス川の向こうにある半島における聖なる言語、パーリー語に関する試論 (Essai sur le pali ou langue sacrée de la presqu'île au delà du Gange)」をパリ・アジア協会より出版した。これが縁で後に彼は同協会の副書記の職を得ることとなる。この本の中で、彼は「パーリー語は、セイロン、ビルマ、シャムなどの仏教のために用いられている学問的で聖なる言語である」と定義し、仏教の文献に関しては、「パーリー語とサンスクリット語の両方を学ばなければ翻訳は不可能である」と述べている。

当時のヨーロッパにおけるサンスクリット語の研究状況といえば、18世紀に出来たウィリアム・ジョーンズ (William JONES) による不完全な文法があるだけで、フランスのブルボン家による王政復古 (1814年) まで、サンスクリット語研究は完全に無視されていた。1814年から1832年にかけて、ドゥ・シェズィー (M. De CHEZY) がヨーロッパで初のサンスクリット語とペルシャ語の教授を行ったが、この機を逃さずビュルヌフも1817年頃よりサンスクリット語の文献を集めていた父と共にドゥ・シェズィーからサンスクリット語を学んだ。

著名なギリシア語学者であった彼の父が、自らサンスクリット語を学び、息子にも学習を勧めた理由とは大変興味深いことであるが、それは、サンスクリット語を学ぶことによって、ギリシア語、ラテン語、セルト語、ドイツ語、スラブ語、すなわちヨーロッパから中央アジアにかけての諸言語の共通点を見出すことが可能になるからであった。この結果、ビュルヌフはパリ高等師範学校 (École normale) より「一般、比較文法学」の教授として招聘されることになる。彼がこの科目を担当したのは、1829年11月から1833年2月までのわずか2年ほどであったが、このポストはビュルヌフのために特別につくられたもので、後任の任命もなく廃止となった。こうして、ラテン語とギリシア語の比較研究にはサンスクリット語が不可欠であることが明らかになったのである。

1829年、ビュルヌフは、パリ・アジア協会の書記に就任し、シャンポリオンの席を引き継いでフランス学士院会員となり、ドゥ・シェズィーの後任者としてコレージュ・ド・フランスのサンスクリット語の教授に任命された。1833年には、ゾロアスター教の聖典「アヴェスター」のゼンド語テキストに基づいて「ヤスナについての解説 (Commentaire sur le Yaçna)」を発表し、ヤスナの補助的祈りのテキストである「ウイスプラト」の訳も完成させた。また同年、彼はイランのハマダンで発見されたダリウス王の楔形文字の碑文を解読した。その他ゾロアスター教関係の翻訳としては、「アヴェスター」から悪魔を払う祈りのテキストである「ウィーデーウダート」を選び、1829年から1843年にかけて訳本全11巻を自費出版している。さらに、ヒンズー教の聖典である「バガヴァット・プラーナ」を13世紀のサンスクリット語のテキストから翻訳した⁶⁾。以上のように宗教的聖典をつぎつぎに精力的に翻訳しながら、しだいに宗教研究への関心を深めていった彼は、ついに1844年、フランス初の本格的な仏教研究書ともいえる「インド仏教史序論 (Introduction à l'histoire du Bouddhisme indien)」⁷⁾を出版する。

この著の第一部において、彼はまず25年間カトマンズに滞在し、カルカッタ、ロンドン、パリにあるアジア協会にサンスクリット語の文献を送り続けたブライアン・フートン・ホジソン (Brian Houghton HODGSON) に最大の感謝を捧げ、

その業績を詳しく紹介している。ホジソンのおかげで、当時パリのアジア協会は88のサンスクリット語の文献を保有し、それによって、ビュルヌフはこの著作を仕上げる事ができた。さらに彼は、フランスにおける仏教史研究の先駆者として、アベル・レミュザ (Abel RÉMUSAT)、トゥルヌール (TURNOUR)、シュミット (SCHMIDT)、クソマ・ド・コロス (CSOMA DE KÖRÖS)、フーコー (FOUCAUX) などの名を挙げながら、彼等のこれまでの研究業績を紹介・検証している。そして、インドからネパール、スリランカへと広がり、一方カシミール地方から中国に広まった仏教は、数えきれないほどの宗派に分れていることを説明し、仏教研究には、中国、スリランカ、モンゴル、チベットの原典に当たるのがより賢明であると主張する。また、彼はスリランカの仏教伝承に基づいて、釈迦の死を起源前547年としているが、同時代の研究者バルテレーミー・サン・ティレール (Barthélemy SAINT-HILAIRE) はインド仏教史に関してはスリランカの文献よりもセイロンの文献資料に基づいた方がより正確であるとビュルヌフを批判している。しかし、サン・ティレールは、ビュルヌフの「仏教の教義に関する正確な知識のおかげで、キリスト教と仏教のあいだにあるといわれてきた空想的な関係についてのばかげた仮説が一掃された」と評価し、「仏教はキリスト教よりも6、7世紀先んじていることが証明された。そして、年代学的に仏教と異なる道を歩んだキリスト教であるが、教義においても仏教からかなり離れていると証明された」と述べている⁸⁾。ともあれ、この著作によって、フランスにおける仏教研究が飛躍的に前進した。仏教以前のインド哲学から、釈迦の生涯を通してどのように仏教が成立していったか、また釈迦の死後どのようにその教えが多様な宗派に分れ、各国独自の仏教を形成するにいたったかを、パーリー語やサンスクリット語の豊富な文献に基づいて解説する彼の方法は、アンドレ・バロー (André BAREAU)⁹⁾を初めその後のフランスの仏教史研究者のスタイルとなり、現在に至るまで同じようなスタイルの仏教史、釈迦の生涯についての著作が数多く出版されている。最後にここでは深く触れないが、ビュルヌフの代表作として、15年以上ものあいだ彼が完成に精魂を傾け、「Le Lotus de la bonne loi (よき教えの蓮華)」というタイトルで、

1952年に出版された訳本を忘れるわけにはいかない。この初の法華經の仏訳本は、サンスクリット語のパーリー聖典から訳されたもので、彼の死の直後、大部分が既に彼自身によって推敲済みであった草稿をまとめ、弟子のパヴィエ (PAVIE) が目録を作成して国立印刷所より刊行された¹⁰⁾。

3 エルネスト・ルナンとビュルヌフの後継者たち

ビュルヌフと並んで常にフランスの仏教史の先駆者として評価を受けているのが、エルネスト・ルナン (Ernest RENAN, 1823-1892) である。彼は幼少よりカトリックの聖職者となるための教育を受けるが、途中で進路を変え、1847年哲学の教授資格を取得。その後、ドイツ哲学、東洋系言語、セム語などを学び、イタリア留学後、1852年アペロエス哲学研究により文学博士号を取得、国立図書館の定員外職員となる。優秀なセム語の文献学者として彼は、レバノンやパレスチナを訪問、その後理性的で批判的なキリスト教を志向するようになる。1862年コレージュ・ド・フランスの教授に任命されたが、第一回目の講義で「キリストは比類なき人間である」と発言したため、彼の講義は1864年まで中止となり、彼が教授に復職できたのは1871年になってからであった。しかし、1863年に出版した「イエスの生涯 (La vie de Jesus)」で世俗的な成功をおさめた彼は、1875年「宗教史研究 (Études d'histoire religieuse)」、1884年「新宗教史研究 (Nouvelles études d'histoire religieuse)」と宗教史に関する著作をつぎつぎに出版する。「新宗教史研究」の中で、彼は仏教研究史に触れ、先駆者であるホジソンやビュルヌフのおかげで、マルコ・ポーロの見聞録以来ヨーロッパに根深く存在していたおとぎ話的な仏教観を一掃することができた」と評価している¹¹⁾。1878年にフランス・アカデミー会員となった彼は、「理性で奇跡の思想や超自然的現象を打ち払うことができ、それは神学的論議にも適用できる」と主張している。1848年に執筆し1890年に出版された「科学の将来 (L'avenir de la science)」においても、彼は「宗教とは、理性の進歩、すなわち科学である」と述べている¹²⁾。

また彼によって、フランスの仏教史研究に「サンクレティズム」の概念が導

入された。人類の存続には進歩が必要であると考えていた彼は、サンクレティズムを人類における本能的な幼児期の段階であると見なし、その段階の歴史科学は聖なる多様性に基づくが最終的には統合を目指し努力しなければならないと主張する。このように常に進化論主義者であり続けた彼が、聖典、東洋の宗教、グノーシス派などから得たものは、揺籃期の流行思想の寄せ集めにしか過ぎなかったが、それは彼の正確な分析に当然耐え得るものであった¹³⁾。サンクレティズムに関してルナンの影響を受けたビュルヌフは、サンクレティズムという言葉で、多様な要素の混合物であるタントラ仏教の特性を表すのに用い、それを「純粋なシバ信仰と仏教が法外に結び付いた結果である」といっている¹⁴⁾。以上のように青年期に東洋の言語を学び、卓越した文献学者として貴重な文献を翻訳しながら宗教史研究に生涯をかけたこの二人が、互いの業績を称讃しながら影響し合っていたところに、後進の研究者もそれに続いて登場し、フランスにおける仏教史研究の土台が築かれたといえよう。

つぎに、彼等の後継者といわれている研究者を簡単に紹介しよう。シルヴァン・レヴィ (Sylvain LÉVI) は、19世紀のフランスの大学機関で初めてインド学を研究指導したサンスクリット語の専門家である。1886年実践高等研究院に第5セクションが設置されたと同時にインド宗教学の主任教授にベルゲーニュ (BERGAIGNE) が任命されたが、翌年にはレヴィが後任として任命を受けた。彼は1894年コレージュ・ド・フランスの教授となり、パリ国立高等研究院でも教鞭をとった。インド、ネパール、インドシナ、中国、日本を訪問。インド文化は、インド・ヨーロッパ系の言語と同じ起源をもち、アジアに移植されたものであると彼は述べている。サンスクリット語の専門家であったにもかかわらず、ヴェーダーをあまり好まなかった彼は、しだいに仏教に大きな関心を持つようになり、仏教研究のために新たにパーリー語と中国語を学んだ。そして、スリランカの小乗仏教と中国の大乗仏教の研究に取りかかった。ヴェーダー哲学思想にあまり興味をもたなかった彼であるが、1898年には、マルセル・モースの依頼で「ブラーフマナにおける供儀の教え (La doctrine du sacrifice dans les Brāhmanas)」を著している。しかし、原始的な要素や魔術的な要素を非難する

彼の実証主義一辺倒なやり方は、今日では残念なことに時代遅れになってしまったとの批判もある¹⁵⁾。

レヴィの弟子であるルイ・ド・ラ・ヴァレ＝ブッサン (Louis de la VALLÉE-POUSSIN) はフランス人の父とベルギー人の母をもち、後にベルギー国籍を取得した。レヴィのもとで東洋言語を学び、仏教について324もの著作を発表した。1898年に出版した「仏教、研究とその材料 (Bouddhisme, études et matériaux)」という著作の中で、8世紀のタントラリズムを初めてフランスに紹介した。世親の研究家としても知られており、1921年にベルギー東洋研究学会を創設した¹⁶⁾。

4 19世紀の宗教研究の特色

先に述べたように、政教分離政策の一貫として、宗教研究を教会や神学者の手から解放するために、1886年ソルボンヌの旧神学部実践高等研究院が設置され、その中の第5セクションが宗教科学研究を担当することとなった。仏教関係の講座としては、第5セクション設置と同時にド・ロニー (De ROSNY) 担当の「極東の宗教」の講座が、翌1887年にはベルゲーニュ担当の「インド宗教」の講座が開設された。

実践高等研究院創設100周年を祝う記念講演論文集において、フランソワ・ラプランシュ (François LAPLANCHE) は、19世紀の宗教研究は、明確な年代区分ではないが、つぎのような3つの段階を歩んだと述べている¹⁷⁾。

第1段階は、言語や神話概念のロマン主義への方向転換である。16世紀から17世紀にかけて、西洋合理主義が自然、世界の創造者のテキスト (聖書)、政治、経済などの分野で支配を確立し、それによってこれらの分野は、「至福千年説を信奉するキリスト教徒」によってつくられたシンボルとその禁欲的文化から離れることができた。そして、このような西欧合理主義に対抗して19世紀にロマン主義が登場し、言語を理解し、神話を再解釈することによって、シンボルを復活できると主張した。ウィルヘルム・フォン・フンボルト (Wilhelm von HUMBOLDT) やエルネスト・ルナンなどのドイツやフランスのキリスト教的

ロマン主義者は、言語の出現は素晴らしいものであり、言語のもつ聖なる力は人類に内在するとする。また、インドのテキストに関しても、カルカッタ・アジア協会所蔵のサンスクリット語の文献が解読されてヨーロッパ中を震撼させ、ヨーロッパの人々は新しい世界を発見した。ヘーゲルがいつているように、「ギリシア人によって、内容と形、すなわち哲学とポエジーが分離された。」しかし、インドのテキストにおいては、「哲学とポエジーの起源的な統一」を容易に見ることができる。このような考えのもとで、数々のインドの聖なる詩歌がドイツ語にまず訳され、そこからフランス語に訳された。これらの翻訳が宗教研究の貴重な資料となり、研究の進展に多大な貢献をした。

第2段階は、比較文献学と比較神話学の発展である。第二帝政下(1852-1870)のフランスでは、比較神話学が宗教史研究において支配的な時代であった。この分野では、エミール・エガー、(Émile EGGER)、アルフレッド・モーリー (Alfred MAURY)、フレデリック・ボドリー (Frédéric BAUDRY)、ミッシェル・ブレアル (Michel BRÉAL)、エルネスト・ルナンなどのグループが活発に活動していた。しかし、この分野での最大の功労者はやはり先程詳しく紹介したビュルヌフである。当時既に「天才文献学者・大ビュルヌフ」と呼ばれていた彼は、比較神話学はもとより、ユダヤ教やキリスト教を含めた19世紀の宗教史研究全体に影響を与えたのである。例えば、ルナンがキリスト教の起源の再構築を試みた場合にも、ビュルヌフが紹介した仏教がひとつのモデルとして用いられたことは明らかである。また、ビュルヌフはフランス宗教社会学の創始者であるともいえる。例えば「インド仏教史序論」において、彼は、宗派の正統性を、ライバルの他の宗派に対して勝利をおさめ多数派となることと定義している。さらに、彼は、先祖崇拜や聖なる火に対する信仰などの例を挙げて、ヴェーダー宗教とイランの宗教の類縁性を示した。多くの未完の仕事を残し突然の死を迎えた彼の後継者となったのが、文献学者で比較神話学者であったドイツ人マックス・ミュラー (Max MÜLLER) であった。当時ミュラーはオックスフォード大学で教鞭を執っていたが、ルナンは彼の著作を英文から仏訳し紹介に努め、ビュルヌフ亡き後、ミュラーの理論はフランスで流

行した。

第3段階は、言語学、人類学、宗教史の発展である。1859年5月パリで「アメリカ・東洋人類学学会」および「民族誌学会」が創設され、1864年にはこの2つの学会は「民族誌学会」に統一された。1866年3月には「パリ言語学学会」も設立された。ルナンを初め、当時の宗教研究者たちはこの3つの学会に同時に所属し、情報意見の交換に努めた。19世紀になってから、言語学、民族誌学、人類古生物学などの新しい科学が誕生し、それらの総称として、当時のフランス人は「人類学」との名称を与えたのである。人類学によって、信仰と文化社会的組織のあいだに緊密で入り組んだ関係があることが発見され、それが宗教史研究に衝撃を与えた。また、人類学が語学を優先させたことから、宗教現象の解釈への道を大きく開いた。このようにして、19世紀末の宗教科学は、啓蒙主義哲学思想とは全く逆の、シンボル、システム、歴史といった方向へ進んでいったのである。そして、東洋の宗教、とりわけ仏教研究によって、フランスの宗教研究に新しい観点が生れた。すなわち、ユダヤ・キリスト教以外の宗教を異教であり、「原始的」なものであると見ていた人々の固定観念を壊し、宗教を科学的に研究する態度が築かれた。キリスト教の研究者たちも、仏教をモデルとして比較研究をするようになった。しかもそれが実証主義に偏らず、神秘的なシンボルや祈りまでも含めた領域までに研究が広がり、後のフランス宗教文化人類学の大発展の基盤を築いた。

また、当時のフランスにおける仏教研究の二大潮流として、シルヴァン・レヴィに代表される「スリランカ仏教」への情熱と、ジャン・ブルズィルスキー (Jean PRZYLUKI) によるニルバナ教 (大乘教) 研究が挙げられる。特に大乘教については、釈迦の死後数世紀を経てキリストが生れる少し前に、「個人だけの救済というエゴイズムを退けた僧侶たちによって発明されたもので、宇宙的な救済の教義である」と紹介された¹⁸⁾。ここで特筆すべきことは、フランスでは、当初より仏教が釈迦の創設した歴史的宗教としてとらえられ、小乗教と大乘教、また様々な経典の研究が教義上の優劣や価値の問題から切り離されて、純粋な学問的対象となっていたことである。その後、ヴェトナム、ラオス、カ

ンボジアなどアジアにおけるフランスの植民地が拡大した折にも、実際アジアに赴きそこで研究を続ける研究者が増えたが、政府の植民地政策を助けるためというよりは、純粋な研究目的でアジア訪問の機会を利用した者が大部分であった。釈迦生誕2500年を祝って1959年、独立後のヴェトナムの首都サイゴンで発刊された「フランス・アジア誌」特別号には1025ページにもものほる数多くの論文が寄せられた。そこに掲載された論文を読むと植民地独立後も変わらぬ仏教研究者たちのイデオロギーに左右されない、真摯な学問的態度がうかがえる¹⁹⁾。

5 19世紀から20世紀にかけてのフランスにおける仏教受容

フランスを含めたヨーロッパ全体を通して、仏教は当初からインテリ階級の関心を集めた。上述したように19世紀中頃からフランスでは、仏教研究が始まったが、公的研究機関に所属している研究者以外にも、1929年にパリで、コンスタン・ルンスベリー女史 (Constant LOUNSBERRY) によって、「仏教愛好協会」が創設され、機関誌「仏教思想 (La Pensée bouddhique)」が発刊されたことが記録に残っている²⁰⁾。

しかし当時の一般の人々にとって、万国博覧会や美術館で仏像を見ること以外、仏教との接点はほとんどなかった。ユダヤ・キリスト教の一神教しか知らない彼等にとって、仏教は植民地のアジア人が信仰する多神教的異教であり、物珍しいものであった。フランス最古の仏教寺院は、パリのヴァンセンヌにあるヴェトナム仏教の寺院で、第一次大戦後フランスのために闘ったヴェトナム人戦没者やその遺族のために政府の認可を得て、開設されたものである。このように20世紀後半まで、仏教の教義への関心はインテリ階級に限られていた。現在もフランス人で仏教に改宗したものの大多数が、高校卒業資格取得以上の高学歴者であるといわれている。また、仏教を「宗教というよりも哲学に近い」と定義する辞書が今もいくつかある²¹⁾。

周知のように仏教は、ニーチェ、ヤスパース、ラッセル、ユングなど専門は問わず多くの近代の西洋知識人に、そして近代科学に多大な影響を与えた。そ

こで最後に、仏教研究者のモーリス・ペルシュロン (Maurice PERCHERON) によるフランス人を含めた西欧人の仏教に対する態度の3つの特質を簡潔に紹介したい。

第1に、フランスのシルヴァン・レヴィの学派に代表されるような、仏教は文明の表象の重要な要因であるとみなす、ヒューマニスト的インテリの態度である。

第2には、仏教によって精神が豊かになり、高揚するという、内観を深化させる態度である。例えば、ハッキン (HACKIN) は、「仏教は私に確かな善を与えた。その限り無い功德を、自制心と呼ぶ。この魂の平等性によって、その変わらぬ寛容を人は受け入れ、理解できるようになるのである。」と言っている。

第3には、カイザーリング (KEYSERLING) が疑いを込めて辛辣に名付けたところの「ブッディザン的 (Bouddhisante, 仏教徒への輕称)」態度である。すなわち、仏教に改宗して、事実上ネオ仏教の信者となることである。バコー (BACOT) が言っているように、「自然発生的な諸言語の中でエスペラント語が果たしているような役割」を果たしているネオ仏教は、人工的な特性をもっているといえる²²⁾。

以上が1950年代のペルシュロンの見解であるが、そこにフランス人で仏教に改宗する者への学者の厳しい態度が明らかになっている。このように、現在に至るまで特にフランスのアカデミズムにおいては、僧侶や家代々仏教徒であったアジア系の研究者を除いて、信仰や実践とは距離を置いた、純粹理論的な研究態度が重んじられている。現在フランスにアジア系移民を含めて40万ないし50万人の仏教徒がいると言われており、フランス人の改宗者もすこしずつではあるが増えてきている。100以上の教団が所属しているフランス仏教連合によると、15万人のフランス人仏教徒がいるという²³⁾。今やヴェトナム仏教などの東南アジア系の仏教、中国仏教、チベット仏教、日本仏教などの多様な教団がフランスで活発な活動を行っている。これらの教団の多くは、經典の仏訳、フランス人教師の育成、宗教間対話などに力を入れている。マス・メディアや多彩な出版物によって作られたダライ・ラマ人気現象やヨガ、座禅ブーム、また

1997年1月より毎週日曜日フランス国営第2チャンネルで「仏教徒の声」というテレビ番組が放送開始されたことなどにより、一般のフランス人が仏教に直接触れる機会が増え、仏教に対する関心も高まってきている。

一方、実践高等研究院や国立科学研究所 (CNRS)、極東学院を初め様々な研究機関で仏教についての研究が行われ、経典の仏訳も進んでいる。例えば、実践高等研究院のジャン・ノエル・ロベール (Jean-Noël ROBERT) 教授による鳩摩羅什の「法華経」の待望の仏訳が本年出版された²⁴⁾。しかし、残念なことに、アカデミズムの研究成果は研究者内にとどまりがちであり、現実の教団やその教義、信仰実践、歴史、経典などについて知識を得たいと思っている一般の人々の目に触れる機会が少ない。特定の教団や宗教家による仏教についての解説書や単なる仏教入門書だけでなく、研究者が科学的に各宗派を研究分析した一般向けの著作、さらには宗教者と研究者の開かれた意見の交換が待望されている。19世紀以来フランスの仏教研究の伝統である特定のイデオロギーにとらわれない科学的で真摯な態度が、今こそ必要とされている。

注

- 1) FRANK Bernard, *L'Intérêt pour les religions japonaises dans la France du XIX siècle et les collections d'Émile GUIMET*, Paris, PUF, 1986, pp. 11-12, p. 15, pp. 19-27, p. 47.
- 2) 例えば、第三共和政下で1887年に仏領インドシナ成立。
- 3) FRANK Bernard, *ibid.*, p. 10.
- 4) 詳しくは、満足圭江, 「ライシテ概念の歴史的変遷と現代フランス社会におけるその問題点」, 「東洋哲学研究所紀要」第12号, 1996年, p. 80, p. 84.
- 5) BAUBÉROT Jean, POULAT Émile 他, *Cent ans de Sciences religieuses en France à l'École Pratique des Hautes Études*, Paris, Cerf, 1987, p. 143.
- 6) ビュルヌフの生涯と業績については, SAINT-HILAIRE Barthélemy, *Notice sur les travaux de M. Eugène Burnouf*, Paris, *Journal des Savants*, Cahier d'août et septembre 1852, Eugène Burnouf, *Introduction à l'histoire du Bouddhisme indien*, BIBLIOTHEQUE ORIENTALE Tome III, 2é éd, Paris, Maisonneuve, 1876, pp. I-XXVIII を参照。
- 7) *ibid.*, pp. 1-28.
- 8) SAINT-HILAIRE Barthélemy, *ibid.*, pp. XXI-XXII.

- 9) BAREAU André, *Le Bouddhisme indien*, Paris, Payot, coll., *Les religions de l'Inde*, III, 1966. *En suivant Bouddha*, Paris, Philippe Lebaud, 1985.
- 10) BURNOUF Eugène, *Le Lotus de la bonne foi*, Paris, l'Imprimerie nationale, 1852. Paris, réd. Maisonneuve, 1989.
- 11) RENAN Ernest, *Nouvelles études d'histoire religieuse*, Paris, Calman-Lévy, 1884. réd. Gaillimard, 1992, p. 344.
- 12) ルナンの生涯と業績については, *Petit Robert 2, Dictionnaire universel des noms propres*, pp. 1539-1540. POURALD Émile, *Dictionnaire des Religions*, Paris, PUF, pp. 1700-1702 を参照。
- 13) COUTURE André, *La tradition et la rencontre de l'autre, Encyclopédie des religions thèmes 2*, Paris, Bayard, 1997, p. 1380.
- 14) BURNOUF Eugène, *Introduction à l'histoire du Bouddhisme indien*, pp. 465-486.
- 15) POURALD *ibid.*, p. 1123.
- 16) *ibid.*, p. 2100.
- 17) LAPLANCHE François, *Philologie et histoire des religions en France au XIX siècle, Cent ans de Sciences religieuses en France à l'École Pratique des Hautes Études*, pp. 34-47.
- 18) *ibid.*, pp. 45-46.
- 19) Numéro spéciale de *la Revue France-Asie*, Saigon, 1959, à Bouddha JAYANTI 2500 An. extinction du Maître. Réd. dir. De BÉRAL René, *Présence du Bouddhisme*, Paris, Gallimard, 1987.
- 20) PERCHERON Maurice, *Le Bouddha et la Bouddhisme*, Paris, Seuil, 1956, p. 165.
- 21) *Grand Larousse Universel Tome 2*, Paris, Larousse, 1989, p. 1385.
- THIOLLIER Marguerite-Marie, *Dictionnaire des Religions*, Bruxelles-Paris, 1995, p. 79.
- 22) PERCHERON, *ibid.*, p. 166.
- 23) GIRA Dennis, *Comprendre le bouddhisme*, Paris, Centurion, 1989, p. 12.
- 24) ROBERT Jean-Noël, *Le sūtra du Lotus*, Paris, Fayard, 1997.

(まんぞく たまえ・ヨーロッパ・センター研究員)